オリンピックスポーツ文化研究
2023. 6　No. 8　93 ― 97

研究ノート

東京オリンピックのスポーツ・ボランティアから得た学び：西條修光名誉教授のインタビューからの検討

相　川　　　聖（関西学院大学　人間福祉学部）
依　田　充　代（日本体育大学　スポーツマネジメント学部）
波多腰　克　晃（日本体育大学　スポーツ文化学部）
清　宮　孝　文（静岡産業大学　スポーツ科学部）
齋　藤　雅　英（日本体育大学　スポーツ文化学部）

はじめに

日本でスポーツ・ボランティアが初めて募集され，社会に認知されたのは1985年のユニバーシアード大会とされている（山下・行實，2015）．それ以降，全国のスポーツイベントではボランティアが募集されており，大会の運営には欠かせない存在となっている．さらに，スポーツ・ボランティアの現状として，メガスポーツイベントの開催など，ボランティアとして参加する機会の拡大により，関心が高まっている（文部科学省，2022）．2021年に東京で開催された第32回オリンピックでは，7万970人が大会ボランティアとして活動しており（二宮，2022），その人数からもボランティアに対する関心の高まりが理解できる．

近年では，スポーツ・ボランティアに関する研究も行われている．特に，ボランティアの経験による意識・行動の変容や参加・継続要因に関する研究は多く行われている．豊田・金森（2002）は，スポーツ・ボランティアの経験により，「新たなる挑戦」といった肯定的な意識の変容があったことを報告している．他にも，スポーツ・ボランティア活動に対して仕事技能を習得できる場とイメージする大学生はスポーツ・ボランティアへの活動意欲が高かったこと（清宮・依田，2021），スポーツ・ボランティアにおいて楽しさを感じることは継続要因であることが明らかにされている（大山ほか，2012）．これらの研究により，スポーツ・ボランティアの参加によるメリットや参加者の増員に向けて必要な要因が精査されている．スポーツへの参画である「ささえる」を担うスポーツ・ボランティアは，大会の運営に必要な存在というだけでなく，参加者自身の学びの機会と捉えることもできる．

一方で，山下・行實（2015）は，これまでのスポーツ・ボランティアに関する研究を踏まえ，「スポーツ・ボランティアの行動原理の解明」から「スポーツ・ボランティアを経験する意味」に関する研究へのパラダイムシフトの必要性を提示し，スポーツ・ボランティア経験者を対象とした定性的な研究の蓄積を求めている．これまでのスポーツ・ボランティアに関する研究成果に加え，さらに定性的な研究を積み重ねていくことで，スポーツ・ボランティアのさらなる普及・発展に寄与するものと考えられる．このことを踏まえると，スポーツ・ボランティアを経験した方へのインタビューから「スポーツ・ボランティアを経験する意味」を明らかにする必要がある．

日本体育大学とオリンピック・パラリンピックのボランティア

1928年にアムステルダムで開催された第9回

オリンピック競技大会に中沢米太郎選手が参加したことは，日本体育大学にとって初めてのオリンピック選手の輩出となった．その後，日本体育大学は，数多くのオリンピック・パラリンピック選手を輩出するだけでなく，スタッフも派遣している．一方で，日本体育大学とオリンピック・パラリンピックの関わりは，選手や競技団体のスタッフのみではなく，ボランティアとしての学生の参加という観点からも理解することができる．佐野（2020）によれば，1964 年に東京で開催された第 18 回オリンピック競技大会（以下, 東京 1964 大会）の組織委員会は運営の円滑化，競技の進行，選手やメディアなどの支援のため，競技団体の関係者や体育大学，体育学部の学生を採用したことが述べられている．実際に当時の日本体育大学の学生は，東京 1964 大会の会場運営のボランティアに従事していた．日本体育大学名誉教授である西條修光先生（以下, 西條先生）もその 1 人であった．

本研究の目的

当時，日本体育大学の学生でボランティアに参加した方から「スポーツ・ボランティアを経験する意味」を明らかにすることで，ボランティアの経験からその後のキャリアへの影響まで明らかにできるものと考えられる．よって，本研究では，西條先生の東京 1964 大会におけるボランティアでの記憶から，「スポーツ・ボランティアを経験する意味」およびボランティア参加の意義やその後への影響を明らかにすることを目的とする．

本研究は東京 1964 大会において，ボランティアとして参加された日本体育大学名誉教授である西條先生のインタビューを基に作成したものである．インタビューは2020年11月10日に実施した．なお，本研究は日本体育大学倫理審査委員会の承認を得て実施している（承認番号：019-H082）．

西條修光先生の経歴

1945 年　兵庫県淡路市北淡町　生まれ
1952 年　兵庫県北淡町立富島小学校　入学
1958 年　兵庫県神戸市立鷹匠中学校　入学
1961 年　兵庫県立私立報徳学園高校　入学
同 年　兵庫県明石市立明石商業高等学校　転入学
1964 年　日本体育大学　入学
1968 年　東京理科大学　研究生として就任
1971 年　日本体育大学　助手として就任
1997 年　日本体育大学　教授に就任

東京 1964 大会におけるボランティアの参加経緯

東京 1964 大会の前年である 1963 年にプレオリンピックとして東京国際スポーツ大会が開催されている．その大会で実施されたマスゲームに日本体育大学の学生が動員されていた．当時陸上競技に打ち込んでいた西條先生は「そういう大学だからいいだろうな」と思い，日本体育大学への入学を決める．入学後，寮生となった西條先生は依頼を受け，1 年生で東京 1964 大会のボランティアに参加することとなる．そのボランティアでは，陸上ホッケーの会場での補助を担当していた．

東京 1964 大会でのボランティアの記憶

西條先生は，東京 1964 大会において陸上ホッケーの予選から決勝までの全ての試合で会場にいたとのことであった．オリンピック期間中，日本体育大学での授業は無く，学生のほとんどはボランティアに参加していたという．西條先生は当時のボランティアでの出来事について以下のように語っていた．

「選手が試合中にコンタクトが外れてえらい目に遭った．芝生の上でどこにあるか分からんやな

いか．ほんで駒沢の球技場で，あそこで．」

コンタクトレンズを落としたイギリスの選手がいたことで，試合が中断してしまうため，みんなで「コンタクト探し」をしたという．ボランティアでは，その他に事前準備や事後の撤収作業の手伝いを行なったり，選手村に行くこともあったとのことであった．

その後のボランティアへの参加

ボランティアという概念は，当時の日本には育っておらず（佐野，2020），ボランティアという言葉も世間に馴染んでいなかった．西條先生は，ボランティアという名称ではなかったものの，手伝いという形で陸上競技の審判員を行なっていたという．当時のことについて，以下のように語っていた．

「当時はボランティアっていう言葉なかったからね．地震があったらボランティアなんて言い出したんで，だけどその頃，手伝いはよくやったよ．例えば私，陸上の資格審査，つまり１種公認審判員とか，ああいう審判員の資格を取りたかったので，だって就職のとき困るから，持ってないと．ほれで，それ取るためには何時間か経験を持ってないと駄目なんだよね．それで手伝いを何度かやってたね．田舎に帰ってもやらしてもらったりした．」

東京 1964 大会のボランティア参加による意識の変化

西條先生は，東京 1964 大会で海外の選手を間近で見た際に選手の体格の大きさを感じたという．また，海外の選手に比べて日本人の選手の体格や体力は貧弱である印象を受けるほど，海外の選手の印象は当時の日本人にとっては衝撃であったようである．さらに，東京 1964 大会のボランティアに参加した際には，海外選手に対する印象の変化だけでなく，日本の選手強化に対しても物足りなさを感じていたという．その時に感じたことを，以下のように語っていた．

「やっぱりただ，口でがーがー言ったって，しょうがないねって思う．やっぱり競技力が向上しない限り，証明にならないよね．つまり自分の持論が正しいとか，そういうふうにはならないねっていうような感じを持ってるね．それは外国選手を見てて違うねって感じはしましたね．」

東京 1964 大会のボランティアで間近に海外の選手との違いを感じたことにより，当時のスポーツ指導とは異なる新たなスポーツ指導のあり方について考えるきっかけになったのかもしれない．また，西條先生は，スポーツ指導におけるパワーハラスメントが起こる背景として「言ったら動く選手を育てたい」という指導者の心情があるとし，それに対し時間はかかるかもしれないが，選手自身に考えさせる指導の必要性があると話していた．そして，東京オリンピックでのボランティアを経たスポーツ指導に対する心境の変化を以下のように語っていた．

「持論だけじゃなくてちゃんと変えていかないと，そういうのがあると思いますよ．だから何のために授業やったり練習やったりするのかを，そのときの指導法にもつながりがあるんじゃないかなっていうふうに思って，できるだけばかな話，言いながら興味を持ってもらって．だから役に立つような話したいなっていうふうに思ったのは，やっぱり東京オリンピックのときに参加してる選手を見たり，あるいはそのときの日本人の指導法なんか見てて，何か足りないんじゃないかなって思いました．」

常浦ほか（2016）は，J リーグのボランティアを経験した大学生を対象とし，ボランティアの学習成果として「スポーツ観の変容」と「価値観の拡大」を明らかにしている．このことから，スポーツ・ボランティアの経験は，経験者自身のキャリアに影響を与える可能性がある．実際に，西条先生は東京 1964 大会でのボランティアの参加によって，海外の選手を間近で見たことは，その後のキャリアに影響を与えていたようであった．西條先生が日本人の指導法に感じた「何かの足りなさ」は，大学生としての学び，その後の教育・研究活動の糧になったものと推察される．

その後の地域社会との関わり

西條先生は，近年まで，日本体育大学の近隣の自治会で副会長を歴任されていたという．その活動の中で，大学がどのように地域と関わるべきかを考えさせられたようであった．大学と地域との関わりについて，以下のように語っていた．

> 「やっぱり大学ってのはあるだけじゃなくて，地域と一緒になってやってるっていうのは大事なことじゃないのか，そのときに学生さんもいろいろと一緒になってやっていくことが，地域につながって出てくるし，自分らがやってることの意味なんかを少しは考えるんじゃないかなっていうふうには思ってるわけ.」

実際にボランティアで地域住民の方と日本体育大学の学生の関わりから，地域住民のスポーツに対する関心が高まったこともあり，「そういうつながりができるっていうのは大事なんで，だから一緒になってやってくっていうのは大事なことじゃないのかな」と語った．山口ほか（2011）は，選手との交流も含めたイベントの満足度は，チームに対する愛着を高め，観戦行動を促進させることを示している．ボランティアによって，選手と地域住民との交流は，結果としてそのスポーツへの関心の向上につながる可能性がある．

また，厚生労働省（2017）は，地域住民や地域の多様な主体が「我が事」として参画し，人と人，人と資源が世代や分野を超えて「丸ごと」つながることで，住民一人ひとりの暮らしと生きがい，地域を共に創っていく社会である「地域共生社会」の実現を目指している．つながりのある地域をつくる取り組みは，自分の暮らす地域をより良くしたいという地域住民の主体性に基づく必要がある（厚生労働省，2017）．そのような主体性を育む取り組みとしても，ボランティアによる体験は有効であるものと考えられる．

大学教育における体験の重要性

インタビューの中では，現在の大学教育における体験の重要性について，以下のように語っていた．

> 「日体大にクリーンの大作戦なんかでもボランティアじゃないので，陸上部がいるわけですね．こういう形って，例えば社会体育なんかで大事な，そこで哲学とは何か，力になってくようなものって，単位っていうのを認めてくような形があっても，いいかなっていうのは私は思ったりするんだよね．何しろああいう体験，教育実習すると授業に対する学生の態度が少し変わるんだよね．ああいう体験っていうのは必要じゃないかなって思いますね.」

学生自身が体験的に学ぶことができる場を提供することで，その後の大学での学びに肯定的な影響を与えるものと考えられる．東京 1964 大会のボランティアの経験によって，西條先生のスポーツの価値観に変容が生じたのと同じように，大会の規模に関係なく，ボランティアは参加者の価値観の変容に寄与するものと考えられる．

終わりに

東京1964大会当時の日本には，スポーツ・ボランティアはおろかボランティアという言葉も浸透していなかったが，日本体育大学は多くの学生を競技会場や選手村に派遣していた．西條先生は，ボランティアでの経験を通じて，スポーツ指導に対する価値観が変容した．このことは，ボランティアでの体験的な学びから得たものであると考えられる．現代においても，当時と変わらずスポーツ・ボランティアは体験的な学びの場として有効であると考えられる．二宮（2022）は，2021年に開催された東京オリンピック・パラリンピックでボランティアに参加した人のうち，若い世代であるほど「キャリアにつながる経験ができた」と感じていたことを報告している．西條先生の語りからも理解できるように，東京1964大会でのボランティアの経験は，西條先生の研究者・教育者としてのキャリアに大きな影響を与えていた．ボランティアで得られる学びは，時代が変わっても変化することなく，参加者にとって有意義な時間になるものと考えられる．

西條先生の語りから読み解く「スポーツ・ボランティアを経験する意味」とは，スポーツに対する価値観の変容によるその後のキャリアへの肯定的な影響と捉えることができる．スポーツ・ボランティアでの経験は，体験的な学びによってスポーツの価値観を変容させ，参加者自身のキャリアの形成に大きな影響を与える可能性が示された．今後も，スポーツ・ボランティアを経験した方を対象とした定性的研究の知見を積み重ねることで，「スポーツ・ボランティアを経験する意味」をより明確にすることにつながるだろう．

参考引用文献

山下　博武・行實　鉄平（2015）スポーツ・ボランティアに関する研究動向―スポーツ経営学からの批判的考察―，徳島大学　人間科学研究，23，pp.39-55.

文部科学省（2022）スポーツ基本計画

二宮　雅也（2022）東京2020大会を支えたボランティアに関する研究　その1－大会ボランティアの成果と満足度に着目して－，日本財団パラリンピックサポートセンター　パラリンピック研究委員会紀要，18，pp.47-73.

豊田　則成・金森　雅夫（2007）スポーツ・ボランティアを経験することの意味とは？びわ湖大学駅伝にボランティア参加した本学学生の「語り」から，びわ湖成蹊スポーツ大学研究紀要，4，pp.9-18.

清宮　孝文・依田　充代（2021）大学生のスポーツボランティアに対するイメージが参加意欲に与える影響，スポーツ産業学研究，31，pp.381-397.

大山　裕太・増田　貴人・安藤　房治（2012）知的障害者のスポーツ活動における大学生ボランティアの継続参加プロセス－スペシャルオリンピックス日本・青森の事例から－，障害者スポーツ科学，10（1），pp.35-44.

佐野　慎輔（2020）【オリ・パラ今ものがたり】日本におけるスポーツボランティア https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2020/47294
2022年12月23日

常浦　光希・田原　陽介・山本　孔一（2016）スポーツボランティアにおける学習成果の仮設モデルの生成　－Jリーグボランティアを経験した大学生に着目して－，環太平洋大学紀要，10，pp.211-216.

山口 志郎，石黒　哲朗，山口　泰雄（2011）ラグビートップリーグにおけるファンイベントと観戦意図に関する研究：神戸製鋼コベルコスティーラーズに着目して，スポーツマネジメント研究，3（1），pp.77-93.

厚生労働省（2017）「地域共生社会」の実現に向けて（当面の改革工程）．

（受理日：2023年2月26日）